

坂本龍馬記念館、令和三年度連続講演会「坂本龍馬を考える5つの視座」
第1回、二〇二一年六月十二日

木戸と大久保の呉越同舟・薩長同盟からの帰り道 - 青山忠正

薩摩との提携のため、山口から上京した木戸孝允は、その帰り、大坂港から大久保利通と薩摩船で途中まで同行した。彼らの行程を、丁寧を追ってみよう。

一、木戸上京の発端

薩摩の黒田了介（清隆）が山口に来る。慶応元年十二月（初と推定）。長州側代表の上京を要請。主命（十二月二十一日）により、木戸寛治（孝允）の上京が決定。奇兵隊から三好軍太郎、御楯隊から品川弥二郎、遊撃隊から早川渡、土佐浪士田中頼助（光頭）が同行。

木戸・黒田一行は十二月二十七日、周防三田尻を出港、翌年正月七日夕、大坂着、大坂薩摩屋敷に投宿。八日朝に川船に搭乘、淀川をさかのぼり、同日夕刻に伏見着。京都に移動、いったん西郷の寓居に投宿するが、数日以内に小松の寓居、「御花畑」邸（近衛家の別邸を薩摩側が借用）に移り、薩摩側と政策提携に関わる交渉を行なう。

史料1、慶応二年正月七日付、西郷吉之助（隆盛）宛て、黒田了介書簡（毛利家文庫『年度別書翰集』第二十七、所収写本）。

その後、貴意を得ず候えども、ますます御勇健に御座ならるべく、珍重南山奉り候、然れば小生も去る月二十八日、防州三田尻港、出帆仕り候処、不順にて漸く今夕方に着坂、御宅（薩摩の蔵屋敷）へ罷りあり申し候、就いては桂氏（すなわち）木戸氏、外に上下八人同船仕り、右御宅内へ罷り居られ申し候、さて木戸氏儀、実に先生（西郷）のみ偏に相慕われ、この節、上国相成り申し候に付き、願わくは大儀ながら、伏見御宅（薩摩屋敷）へ同伴仕りたく御座候あいだ、右へ御待ち迎い成し下さる儀、相かない間敷哉、明五ツ過ぎ（明日の午前八時頃）ここもと出帆の筈に御座候に付き、少々宵に入り申すべく候あいだ、御案内のため申し上げ置き候、もつとも其許御都合も然るべき様願ひ奉り候、まずは以て大略要用のみ斯くの如くに御座候、謹言、

寅正月七日

黒田了介

清隆（花押）

西郷吉之助様

淀川の上り舟は、天満八軒屋の船着き場から伏見まで約十時間。下りなら五時間。「桂小五郎」から「木戸寛治」へ改名したのは前年九月。三ヶ月前だから周知徹底されていない。特に他国人の書簡などでは、よく混乱。

木戸が七日に泊ったのは、土佐堀通沿いの薩摩上屋敷。そう判断できる根拠は？

木戸はこのとき（八日に船中で）詩を賦している（『松菊木戸公伝』上、五九三頁）。

天道未だ知らず是や非や、陰雲四塞して日光微かなり、吾君の邸閣看るに見難し、春雨涙の如く破衣に滿つ。

「吾君の邸閣」は長州（毛利家）の蔵屋敷。薩摩の上屋敷から東へ二筋。禁門の変（元治元年七月、一年半前）のあと、徳川家の命令で破却された。その跡地を見て涙が出た。

伏見には西郷、村田新人らが出迎え、竹田街道を陸路で京都市内に向かった。御所北側の西郷寓居迄、一時間半程度。

なお、黒田の長州行きは彼の独断によるという説もあるが、先の黒田書簡を見る限り、西郷も内々は承知していたのであろう。君命を受けての行動でないことは確か。また、誰が上京するか（あるいは誰も上京しない）、上京日時はいつか、などは正月七日まで不明。最高指導者（用談役）木戸が上京してきて、薩摩側があわてたとしても不思議ではない。

2

二、御花畑での交渉

木戸と、小松帯刀・西郷吉之助・大久保一蔵（利通）との御花畑での話し合いは、正月十日頃から始まったと思われる。両者の提携に関する具体的な協議は進展せず。薩摩側は、間もなく勅許を得て決定する見込みの**長州処分**（禁門の変に対する將軍による処分。十万石削地・当主父子退隠・三家老の家名断絶）を、長州が受け入れるよう要請。木戸は受け入れを拒否して話し合いは平行線をたどる。

正月二十日昼過ぎ、坂本龍馬上京。木戸から状況を聞き、西郷を説得したとみられる。西郷も折れて、木戸に対し、その言い分を認め、長州の復権（具体的には当主父子の官位復旧。いわゆる朝敵指定の解除）のため、周旋尽力することを約束した。長州が処分を受け入れないことで、「幕長開戦」もやむなしと認めた。その場合の後方支援も約束。

この薩摩側の発言が、いつの時点でなされていたかは特定できない。十日から二十日に至るまでの話し合いのなかで、断片的に薩摩側から漏らされた、と見ることもできよう。

「同盟」というのは歴史用語であり、双方の全権が正式文書に調印したようなものではないので、いつ成立とも断定しにくい。

龍馬同席のもと、最終的な詰め交渉が行われたのは二十一日の昼の内であろう。この交渉の中でポイントは長州処分。將軍からの奏聞を受けて、朝議で決定される見込み。それが開催されるのは二十二日。確定は同日夜。したがって、長州処分は厳密には未決定。内容は知られているから、その通りに決定するだろうとの、いわば見切り発車の状態で詰め交渉が行われ、木戸はただちに京都を出立。急いで出立したのは、在芸使節（後述）に一刻も早く連絡するため、及び薩摩の蒸気船便の都合と推定。

三、木戸は大坂で龍馬宛て書簡を書いた

正月二十一日夜、木戸は小松邸を出立。同行は三好・品川・早川・田中、それに黒田了介。来た時と同じ。同日夜遅く伏見発、大坂へ。下りは夜船が原則（五時間程度）。上りは曳き船で時間と手間がかかる。翌二十一日朝、天満八軒屋に到着。例の薩摩上屋敷に投宿。

大久保一蔵も情勢報告のため帰国。二十二日午前中に京都出立。長州処分の朝議開始後。当日夕刻に大坂着。薩摩上屋敷に入る。木戸と顔を合わせ、長州処分決定の見込みを告げたと推測される。翌々二十四日朝、西郷からの書簡で長州処分の予定通り決定を知る。

史料2、正月二十四日付、西郷宛て、大久保書簡（『大久保利通文書』一、三五三頁）。

貴翰今朝相達し、有難く拝見（中略）さて一昨二十一日、**長州御処置一条、奏聞相成り、伺通り聞し食され候由、差し知れ候ながら遺憾の次第に御座候**、とかく是より乱に入り候外、これ有るまじく候（後略）

この西郷からの書簡到着は二十四日朝だが、大久保は二十二日着坂時点で、長州処分が奏聞通り決定するだろうとの確実な見込みを持っていたことが分かる。

戻って、二十二日夕刻以降、大久保と薩摩屋敷で会った木戸は、大久保の情報と判断を確認したうえで、龍馬宛てに二十三日付書簡を書き、いわゆる同盟六カ条をまとめ、もしかりに、長州処分が決定せず、幕長開戦の可能性が無くなり、当主父子の官位復旧も見通しが付けば（ありえないだろうが）、先の薩摩側との交渉内容は、前提がすべて消滅する。そうはならない、という確信を得て、木戸は龍馬宛てに書簡を書いたと考えられる。

その内容の概略。

①幕長開戦となった場合、薩摩はすぐさま二千余の兵力を増派し、京坂両所を固め、長州

に対する後方支援を行なう。

②戦況が長州有利の状況なら、薩摩は朝廷に向け、きつと尽力する。

③長州が不利の状況でも、一年や半年で壊滅することはないので、その間に薩摩は必ず尽力する。

④開戦に至らず、幕兵が江戸へ帰るような場合でも、薩摩は朝廷へ申し上げ、長州の冤罪が御免になるようきつと尽力する。

⑤薩摩が兵力を増派しても、橋会桑が現在ののように朝廷を擁して、周旋尽力の道を遮るようなときは「ついに決戦に及び候外これ無しとのこと」。

⑥冤罪も御免のうえは、双方誠心を以て力を合わせ、皇国の御ために尽力すること。

二月五日付、龍馬の裏書。

表に記された六条は、小松・西郷、木戸・龍等も同席で談論したことで毛も相違無之候、

木戸は、この書簡で薩摩の朝廷向け「尽力」や「周旋尽力」を繰り返しながら、その具体的な内容を一切書かなかった。毛利家当主父子の官位復旧のための周旋だが、言わずもがなであり、書くのも恥なのであえて書かなかったと考えられる。

四、帰り道

木戸と大久保は薩摩屋敷で正月二十二日夕刻から二十四日夜まで二泊と三日にわたって同宿。二十四日深夜（現代時制では二十五日午前一時〜二時頃かと推定）に大坂港から薩摩の蒸気船、三邦丸に搭乗。二十六日（朝方）、木戸は御手洗（芸州竹原の沖、大賀下島、東端の港）で下船。船中で二泊と一日半程度。大久保はそのまま乗船、鹿児島へ。木戸は御手洗から広島へ。二十七日着。滞在中（幕府側と応接のため）の宍戸璣・楫取素彦と会談ののち、二月六日に山口に帰着。

つまり、木戸と大久保は二十二日から二十六日まで、少なく見ても八十時間以上、同宿または同船。なにも話し合わなかったと見る方が不自然。

史料3、二月二十二日付、大久保宛て、木戸書簡（『木戸孝允文書』二、一五三頁）。

（前略）帰路は御艦へ乗り組みまで仰せ付けられ、前後、容易ならず御厄介に相成り、謝する所を知らず有難く存じ奉り候、御手洗においては余儀なく匆卒の御別れ申し上げ、折角、（下）関御着泊の上は緩々御上陸をも願ひ奉り候様に申し聞け置き候処、雨中彼是にてその義を得ず、万端不都合のみ申し上げ候事恐れ入り奉り候（後略）

これは礼状で、話し合った内容などは一切書かず。いっぽう、大久保もこれに対する返書を、四月二日付で出しているが同様の挨拶状。

実は、木戸と大久保がこの時、話し合った内容は不明。二人とも一切書き残さず。今後発掘される可能性はある。

とくに、在芸使節の穴戸璣・楫取素彦と、正月二十七日から二十九日まで（『松菊木戸公伝』上、六〇三頁）、広島で会談した時も、京都での薩摩側との交渉内容や、大阪で、また船中で大久保の言ったことなどを伝えてはいるはずだが、現在のところ史料として知られていない。毛利家文庫所収の未公刊史料からでも発掘できる可能性あり。

大坂から三邦丸に搭乗したメンバーは、長州の品川・三好・早川・田中のほか、薩摩の黒田了介（清隆）・黒田嘉右衛門（清綱）もいるので、両黒田関係史料も探索の価値あり。

参考文献

- 末松謙澄『防長回天史』第五編中、末松春彦、一九二二年（マツノ書店、二〇〇九年復刻）。
町田明広『薩長同盟論』人文書院、二〇一八年。
三宅紹宣『薩長同盟』一般社団法人萩ものがたり、二〇一五年。
同 『幕末維新の政治過程』吉川弘文館、二〇二二年。

史料

- 勝田孫彌『大久保利通傳』中巻、一九一〇年、同文館（マツノ書店、二〇〇四年復刻）。
木戸公傳記編纂所編『松菊木戸公傳』上、明治書院、一九二七年。
長谷吉治『大坂の史跡探訪』1, 2. 大坂龍馬会、二〇一二年、一三年。
枚方市教育委員会『市立枚方宿鍵屋資料館 展示案内』同委員会、二〇一二年。
米田雄介編『明治天皇とその時代・『明治天皇附図を読む』』吉川弘文館、二〇一二年。